

## ロードサービス隊、雪夜の救出

この話は10年ほど前にタイ空港の重役家族が銀山に訪れ起こった実話です。

その年は雪の降るのが遅く乾燥していた道路を夏タイヤで訪れ、雪に降られトラブルに見舞われた話である。車がスリップして動けなくなったアナン一家。外は深い雪、気温は氷点下。アナンはスマートフォンを取り出し、震える指でロードサービスに連絡を入れた。「場所は、銀山温泉へ向かう県道、どもと高齢者がいます。助けが必要です」。電話口のオペレーターは落ち着いた声で答えた。「大丈夫です。すぐにロードサービス隊を向かわせます。車内で暖をとってお待ちください」。その言葉に、アナンは少しでも胸をなでおろした。

30分ほど経った頃、遠くから低いエンジン音が聞こえてきた。雪をかき分けるようにして、黄色いライトを点滅させた大型のロードサービス車が近づいてくる。「来た…！」マリサが小さくつぶやいた。

車が止まると、厚手の防寒服に身を包んだ隊員が二人、素早く降りてきた。「お待ちせしました。大丈夫でしたか」、「子どもさんもいるんですね。すぐに対応します」。その声は力強く、そして優しくかった。

隊員たちは手際よく状況を確認し、タイヤの下の雪を掘り、滑り止めのブリッジを敷き、牽引用のワイヤーを車体に取り付けた。「パパ、すごいね…」、リナが窓越しに目を輝かせる。「日本のヒーローだよ」、トーンがつぶやくと、祖母スワニーは静かに微笑んだ。「世界中どこでも、人の優しさは同じね」。隊員の一人がアナンに声をかけた。「合図したら、ゆっくりアクセルを踏んでください。焦らなくて大丈夫です」、「はい、お願いします」、「いきますよー！ 引き上げます！」。ロードサービス車のウインチが唸りを上げ、車体が少しずつ雪の溝から持ち上がっていく。雪煙が舞い、ライトが反射し、まるで映画のワンシーンのようだった。やがて、車は完全に脱出した。

「本当に助かりました。家族を守ってくれて、ありがとうございます」。アナンが深く頭を下げると、隊員は笑って言った。「いえいえ。銀山温泉は雪が深いですからね。無事で何よりです。旅館まではあと少しですが、夏タイヤで走れないので積載車で運びましょう」。その言葉に、アナンの胸が熱くなった。

作業が滞りなく終わり、車が再び走り出すと、後ろで子供たちが見えなくなるまで手を振っていた。雪の中を去るその姿は、まるで夜の守り人のようだった。